

かしながら、発展途上国と一口にいても、その国の置かれている状況や環境は千差万別であり、主要なテーマも当然異なってくる。したがって、開発経済学は実践的かつ実証的な学問分野であり、マクロ経済学的・ミクロ経済学的アプローチ、更には計量分析のテクニックも必要とされる学問である。本書は、経済成長・開発援助・援助政策などの問題点に対してマクロ経済理論を援用し、丁寧かつ厳密に分析を行っている。先進国が経済的に繁栄する一方で、成長から取り残される国があるのはなぜか。貧困削減に向けてのミレニアム開発目標（MDGs: Millennium Development Goals）を達成すべく、世界は、日本はどのように貢献していくべきか。このような問題意識に基づいて、本書は以下の6章から構成される。

第1章「経済格差のマクロ経済学」では、所得格差の現状とその格差を理解するための経済理論として新古典派成長理論及び内生的成長理論を展開しており、第2章「開発援助の役割と効果」では、その経済成長理論に基づいて開発援助の役割を考察している。開発援助のマクロ経済学的アプローチを理解するために必要な基礎的概念及び諸理論、並びに最近の研究についてわかりやすく解説されている。第3章「開発援助がもたらす5つのマクロ経済問題」では、開発援助がもたらす5つのマクロ経済問題（開発援助により政府歳入の徴収努力を損なう点・政府歳入の変動の変化により景気変動が拡大する点・援助資金が非生産的分野に支出される

点・実質為替レートの増価により輸出産業が停滞する点・対外債務の累積により経済成長が低迷する点）について論じており、第4章「受益国の援助吸収能力と供与国・期間の援助動機」では、受益国側と供与国側についての問題を扱い、開発援助の在り方を考察している。第5章「ミレニアム開発目標と最近の援助戦略・資金調達案」では、MDGsについての具体的な内容と数値目標を詳細にサーベイし、現時点での進捗度と達成の見込みについて考察している。第6章「日本のODA政策と課題」では、日本のODA政策について、その歴史や経緯を概観し、日本の援助政策が直面する課題について検討している。

本書は、理論と現実の双方に重点を置き、先述した開発に関わるマクロ経済的諸問題を体系的に扱っている。開発援助に関する最近の研究も数多く取り入れられており、この分野における研究のサーベイ書としての価値もある一冊である。開発経済学を学ぶに当たり、以下のテキストも参考となろう。様々な開発問題を取り上げ、各章が読み切りとなっている開発経済学のベーシックなテキストとして、ジェトロアジア経済研究所・朽木昭文・野上裕生・山形辰史編著『テキストブック開発経済学（新版）』（有斐閣ブックス、2003年）及び、ミクロ経済分析に重点を置いている開発経済学のテキストとして、黒崎卓・山形辰史『開発経済学——貧困削減へのアプローチ』（日本評論社、2003年）を併せて参照されたい。

高木きよ子著

『八人の女帝』（大明堂、2002年6月発行、1800円）

—————長谷部 恵理

最近、新聞や雑誌などで皇室典範の改正がよく論じられている。現在のままでは、皇位継承は男子の皇族に限られているが、次次代は女子の皇族ばかりのため、その危惧への対策であり、

これからは女性天皇誕生の可能性が出てきたことになる。

他国に目を向けてみると、イギリスやオランダでは女王を置いているが、日本においては、

もし今後女性の皇族が皇位につけば、江戸時代以来の女性天皇、いわゆる「女帝」の誕生ということになる。その「女帝」とは、日本においてどのような存在であったのか（因みに古くは「じょてい」ではなく「によてい」とよんでいたようである）。

本書のタイトルからわかるように、日本には八人の女帝が今までに存在する。しかし第三十五代皇極天皇と第四十六代孝謙天皇は重祚（二度皇位につくこと）し、それぞれ第三十七代斉明天皇と第四十八代称徳天皇として再び即位されているため、実際には八人十代の女帝が存在した事になる。

本書では、その八人十代の女帝について各々項を設け、それぞれどのような経緯をたどって天皇として即位したのか、そしてどのような天皇であったのかを丁寧に述べていく。

日本史上の女帝は、飛鳥・奈良時代に六人八代、そして飛んで江戸時代に二代存在しているが、そのほとんどは前者の飛鳥・奈良時代にかたまっている。この時代、推古・持統・孝謙・称徳など、日本の歴史上でも有名な天皇が存在した。前述の通り、本書では、即位までのいきさつ、その時代的な背景などが述べられており、それとともにそれぞれの天皇の内面に近づこうとしている。一例を挙げれば、称徳天皇はあまりにも有名な道鏡との関係が挙げられるが、本書ではそれらを含め、称徳天皇を「女性」と「天皇」という立場を分けて考え、一人の女性として生き方を貫いた、「男子の天皇に匹敵する強靱な精神と、女性ならではの心の弱さの両面」をもつ方だと分析している。

一方、江戸時代の二天皇、明正天皇、後桜町天皇については、一般にあまりよく知られていないか、もしくは江戸時代に女帝がいたことについて知らない人も多いのではないかと。というのも、江戸時代は、徳川幕府が政治権力を握っていたため、自然朝廷の方は影が薄くなる。そ

のために、この二人の女帝の存在も影に隠れてしまいやすいが、個人的にはこのあまり知られていない両天皇がどのような天皇だったのかと以前から関心を持っていたため、本書においては江戸時代の項を特に興味深く読んだ。

明正、後桜町両天皇ともに、前時代の女帝のような存在感はあまりなく、その人となりを伝えるものは少ない。しかし本書では、残された資料から、両天皇の内面を伝えようとしている。また著者は、この江戸時代の二代の天皇を、自身の意志に全くよることなく、周囲の意向で天皇の地位についた天皇だと分析する。そして、そのような状態の中で幕府と朝廷の様々な政治的思惑に翻弄されながらも、自分の仕事を全うしようとした両天皇の姿勢を導き出している。

本書の特徴の一つとして、飛鳥時代から江戸時代にかけての八代十人の女帝を一冊の本に紹介しているところが挙げられる。本書の「あとがき」でも述べられているように、日本史上の女帝を一冊にまとめているものは意外に少ない。本書に目を通す事で、天皇親政であった飛鳥・奈良時代の女帝と、幕府主権の江戸時代における女帝との対比や、各時代の天皇の違いを考えることも可能である。

また本書は終始、著者による同じ女性としての、そして人間としての暖かい視線と、歴史というものを扱う上での限らない客観性と冷静さ、その両方の適度なバランスを保ち続ける姿勢を崩していない。女性であるがゆえに背負わなくてはならなかったもの、女性であるがゆえに出来たことなど、女帝誕生の可能性が再び出てきた昨今、本書のような本で、日本にどのような女帝がいたのかを知ることにも必要かと思われる。

（なお本書は2005年10月、著者が加筆修正のうえ、富山房インターナショナルから再刊されている）